

1930年8月29日

東京にて

愛するお母様

東京の話が始める前に、ペトロバヴロフスクのことを少しだけお知らせしたいと思います。そこは、とても面白くて変わったところでした。宝石のような港は急峻な緑の火山のような丘陵に位置しています。丘陵の片側の側面に、グレイの屋根が頂きに向かってどんどん建っています。造成工事が進行中のかなり大きな町であり、また、忙しい港です。小さな港です、小さいけれどとても深い港です。大きな船はあそこでは方向転換出来ません。

大勢の男性が私達を出迎えてくれました。その中には、陸軍の制服を着た人達が数人いました。それから私達は、労働者の群れの中を歩いて、古いけれども快適なオープンカーに乗りました。彼等は心温かく、陽気でとても思いやりがあります。私はどういうわけか、「どうせ丁重には扱われない」ものと覚悟していました（ヒンダスの本です）⁽¹³¹⁾が、ぬかるみでは私に手を差し伸べてくれました。私達は丘陵を取り巻いている急勾配の埃っぽい道路を、ガタガタ揺れながら上って行きました。

通りには人ごみもなく、大勢の忙しい人達が、自分達のやるべきことに打ち込みながら、木で作られた歩道を行ったり来りしていました。私達は猛スピードで、子供達や豚やデコボコを避けながら、道路をジグザグに進みました（子供達、それから豚も、健康で幸せそうでした！）。

おしなべて、人々はとても健康で幸せそうでした。それほど高級なもの身につけていませんが、地味な古着した服を着ています。女性達はぶかぶかのシャツブラウスを着て、とても短いスカートをはいています。道路に沿って並ぶ家はどれも古く、かなりガタガタですが、大変に魅力があります。ひさしには彫りものが施してあって、中には色づけされた

(131) モーリス・ヒンダス著『失われた人間性』

ものもあります。そして、どの家も忙しく働く人達でいっぱいです。町はざわついていましたが、板で囲った窓のある、草が深く伸びた庭を持つ白い教会は別でした。その庭には労働者が、午後の昼寝のために大の字になっていました。

私達は公邸に入りました。かなり古い、何階建ての大きな木造の建物です。トラクターや労働者のポスターや、資本主義者の宣伝ポスターが貼ってある廊下を通して、きれいな角の部屋に入りましたが、そこには簡易ベッドが3台置いてありました。そのうちの一つは、古い中国製の刺繍の施してあるついたてで仕切られていました。このベッドは、チャールズと私と整備士のためのものだったのです！ それから、二人の男性用に髭剃りが2つ、私のためには香水が1本置いてありました。

水道水も使えました（高架式タンクから汚水壺へ流れます）。部屋の中に洗面器があり、手や顔を洗った後で、お母様にいただいた頭痛用の粉薬（お母様のメモのお蔭で甘くなっています）を1包飲みました。薬を飲んだのは、これが初めてです。（ノームからカラギン島までの旅は厳しく長い飛行でしたし、次の朝またすぐに旅を続けたせいです）それから、チャールズがこの旅でとても好きになった（私はずっと好きでしたが）黒パンと、ポーク、サワーミルクに漬けたレタスとラディッシュ（とても美味しいものです）、それにグラスに注いだとても甘いお茶、ロシアのチョコレートとクッキーの美味しい食事が、私達のために運ばれてきました。

翌日の夜にペトロバヴロフスクでは、役所で晩餐会を開きました。町の高官が全員出席し、私がここで最初に会った二人の女性も来ていました。

何の飾りもない部屋の壁には、レーニンやその他の指導者達の大きなポスターと写真が貼りつけてありました（官庁ではどの部屋にも、レーニンの胸像が写真があります）。誰も盛装はしていません。男性の多くは髭を伸ばしていますが、陽気で温かい人柄が感じられるとても良い人達で

す。私は地方委員会の委員長の隣に座りましたが、おとなしく気さくな方です。彼は、以前には20年間金属工場で働いていましたが、今は地方自治委員会の委員長です。ここで、贅沢なディナーをいただきました。何でも大量で、とくにワインがいっぱいありました。大きな楽しみは、考えつくかぎりの人の名前を挙げて、そのたびに乾杯をして私達にお酒を飲ませることでした。何度も何度も、チャールズと私は、自分達の唇にグラスをもっていきましたが、いつもグラスには同じ量が残っていましたわ。^{*43}これには、言葉には表わせないほど、皆面白がっていました。

一番熱烈でしつこかったのは、陽気でふくよかな女性で、しょっちゅう私に向かってグラスを上げ、きらきら光る目で、

「あなたの坊っちゃんに！」

「あなたのお母様に！」

「あなたのお父様に！」

「あなたの旅に！」

とやるのでした。

2、3人英語を話す人がいて、私は一人の少女と学校を見学したり、お店などを見たり、質問をしたりして、町を歩き回りました。あの小さな町に学校が3つあるのです。13歳になると反宗教論を教えられます。ロシアでは、13歳以下の子供から教え始めるのを恐れているのです（私に教えてくれた人によると）。なぜなら、子供が「神様って誰？」と聞いてくる時、取り去ることの出来ない印象をその子が受けることを恐れているからです。

もし、科学者が実験的な研究にもっとお金が必要な場合には、ザフ（共産党の地方代表者。私達は彼に会いませんでした。どこかへ出かけていたのです）に要請を出すと、科学者にはおしげもなく費用を与えられますが、旅行することは許されていません。繊細なユーモアを持った、私

*43 チャールズはお酒を飲まない人であった。

の素敵なガイドが説明してくれました。丘の上にある町の中で一番立派な家を指して、「昔は司祭長がいて、彼は“あの上”に住んでいました」と。そして、知事は通りを上まで走って行って、まず司祭長の祝福をいただかないことには、何にもしようとしなかったのです。

「今は司祭がいなくなりましたが、ザフがいます。そして、地方委員会の委員長がどうしていいかわからない時には、丘を駆け上り（同じ家を指して）、自分のしている通りでいいのかをザフにお伺いをたてます！」

私達が出発する前夜に、なかなかの冒険をしました。朝の4時頃、大きな叫び声に目を覚めました。鋭いポツポツとぎれる叫び声が、ぶっきらぼうに次から次に飛びかっています。それから、ガラスが割れるすさまじい音がしました。チャールズが窓のところまで跳んで行きました。「あれは本当に叫んでいるんだよ。飛行機に何事かあったのか、火事かのどっちかな！」

私達には、窓から無事な姿のシリウス機が見えました。叫び声ももっと上がり、煙の臭いがしました。火事です！

「早く、服を着て！ ここにあるものを一緒に毛布に包むから手伝って——ここだよ、窓の側^{そば}だよ。そうすれば、必要なら外に投げ出せるからね。」

窓を開け、カーテンは巻上げられ、窓の側には私達の荷物が全部毛布にくるまれて置かれました。「戻って来るからね！」

そして、チャールズはドアを開けました。煙がワーッと入ってきました。彼は部屋から出ていきましたが、すぐに、口と鼻を押さえるために濡れたタオルを取りに戻ってきました。

「戻ってくるからね。階段はまだ降りられるけれど……簡単に飛び降りられるよ。一階だもの——窓からね。」

私は、簡単に飛び降りるなんて……と、外を見ましたが、降りるのなら窓の下枠につかまって飛び降りることが出来ます。男の人達がバケツを持って、こちらに向かって丘を駆け降りていました。

その間、半時も経ったように思いましたが、廊下を走る足音が聞こえました。大きなノックです。

「どうぞ！」

おびえた表情の男性がドアを荒々しく開き、一瞬ためらって、

「マド、アケル！」

「ええ、もう開けましたわ」

彼はドアを閉めて、そのまま走り去りました。

また、しばらく待っていました。下の通りでは声が静まりました。チャールズが戻って来ましたが、笑っていました。

「消えたよ。」

私達はカーテンを下ろして、ベッドに戻りました。「下に置いてある資料の一つに火がついたんだよ。ひどくはならなかったけれど、燃え始めていたら、この家はたきつけみたいに燃えちゃったね。」

間もなく、下の通りから聞こえるチリンチリンという音と、馬車のガラガラという音で起こされてしまいました。外を見ると、1頭立ての軽馬車が、巻かれたホースと建物の中まで引っ張られた小さなタンクを引いていました。二人の男性が、建物からドラマチックに素早く飛び出して来ました。彼等は蜜蜂の巣の形をした真鍮の消火用ヘルメットをかぶり、大声で命令していました。

なんと、それが消防車です！

1930年 9月17日

大阪にて

1931

愛するお母様

お母様のお手紙はなんて嬉しいのでしょう。私には書く暇がなかったのに、2通もいただいてしまいました。今までこんなに手紙が欲しかったことありませんし、こんなに楽しんで読んだ手紙也没有せん。私は何回も何回も読んで、最後にいただいた手紙をどこに行く時もハンドバッグの中に入れて持ち歩き、ベッドにヒョイと入る時には、灯りを消す前に読めるように、2通ともベッドのそばに置いてあります。

お母様がチャーリーの様子を書いて下さったのを読むと、申し分なく、元気で楽しそうです。あの子が遊んでいる様子や、お母様が机で書き物をしていらっしゃる時に、お部屋を探検したりすることなど、お母様が教えて下さることはすべて嬉しく思います。そういう光景やあの子が積み木を持って芝生の上を這い回る様子を、想像することが大好きです。それから坊やの巻き毛がブルーの帽子からはみ出しているという描写も……。どれも私が知りたかったことばかりです。

夜には、寝つかれないあの子をあやすためにダンスをして下さって、本当にありがとう。ああ、お母様、心配しないで下さい。あの子はお母様と一緒にいるのだから、私はとても満ち足りています。お母様があの子のためになることを、ちゃんとして下さっているとわかっています。

こういう手紙では、私はとうてい今まで書かなかった分を挽回出来なと思いますので、目玉のところだけを、かいつまんで書かなければなりません。それに、お母様達は、私が思っていたよりももっと多くの情報を新聞から得ていらっしゃるのですが、ただとても誇張されています。千島列島の計吐夷島沖では私達はちっとも大変ではありませんでしたし、チャールズは数ヶ所に着水しようとして不成功に終わりましたが、最終

的には大成功で、濃い霧の中に着水しました。

私達は一度も危険な状態にはなかったと、彼は言っていますが、無事に降りることが出来てとても有難く思ったので、他のことはどうでも良かったのです。ただし、無線が通じるようになるまでは、私は心配していました。投錨するための静かな場所を見つけるために、滑水している間が一時間以上（2時間近く）あり、その間無線の連絡がとれませんでしたので、“墜落”の噂を流されたくなかったのです。無事に停泊し、無線通信が再開出来、私がスイッチを切る前に、先方の通信士が、私達が無事に到着したという知らせを伝えようと慌てているのが聞こえて、至上の安堵感を覚えました。

それから、私達は機体の前方の手荷物を入れるところに（大きなガソリンタンクを取り除いた、かなり大きなコンパートメント）荷物を平らに広げて、その上にやわらかい飛行服を置いて、寝袋を広げました。私達は、前方の座席まで身体を伸ばして寝そべりました（チャールズは、あちこち角のでっぱったところでは、足を曲げなければなりませんでした）。サンドウィッチとチョコレートの食事の後で、私達は熟睡する事が出来ました。

翌朝、無線通信のスケジュールを立てていましたが、その最中に、私達の側にシムシル丸がいることがわかりました！ 丸い海軍の帽子をかぶった4人の陽気な歌う水兵達が、船を漕いで、無線技師を私達のシリウス機まで連れて来ました。その無線技師は、たどたどしい英語を話し、シリウス機によじ登る時にアンテナに触れ、感電しかけたにもかかわらず、とてもよくしてくれました。

彼にはこやかで申しわけなさそうにしている小柄な人物で、一生懸命に手を貸してくれようとし、自分が痛い思いをしたのに謝っているのです。それから、彼がチャールズに「アナタ、アー、ノム？ アー……コヒイ？」

〔シムシルとは新知島からとった船の名前。日本の船である。〕

と尋ねましたが、チャールズは「クッキーを持っているか」と聞かれたのだと誤解して、昨日ペトロバヴロフスクでいただいた柔らかいクッキーを、彼にいくつか手渡したのです。

彼はとても礼儀正しく、ニコニコしながらそれを食べ、それからまた忍耐強く

「アナタ……アー、ノム？ アー ア コヒイ？」

と、やってみるのです。

チャールズ 「？」

無線技師 「コーヒィ ^{sheep} シープ アル」

と、シムシル丸を指差して、にっこりしました。

ああ、羊でなくて、船（ship）で、コーヒーね。やっと、私達は理解して外に這い降りました。全員にっこりでした。

（今、ちょうどこれをチャールズに読ませたところ、これは全然本当のことじゃなくて、「クッキーを勧めたのは礼儀だからで、それにクッキーをあげれば、朝食をとっていないことを考えてもらう動機になると思った」なんて言うのよ。）

シムシル丸はとても小さな船でした。立派なキャビンがある大きなヨットのようなです。でも、私達には快適に見えました。急勾配の梯子をつたって、快適な暖かいキャビンに入りました。そこには、ハンサムなキャプテンと二人の士官が座っていました。ニコニコした、カタコト英語の無線技師はそこに私達を残して、自分の仕事に戻りましたが、チャールズと私は、船長達とはジェスチャーをしながら話をしました。

でも、私達はうまく話が出来ました。彼等は、私達が何か言う前にすべてのことを理解しているようでした。金属製の洗面器に熱いお湯、タオル、櫛、コールドクリーム、そして魔法のように梯子を伝って運ばれる熱いコーヒーとトースト。あとはもう大体おわかりでしょ。

その時の私達は、シリウス機のエンジンがかかりませんでした。^{いかり}錨のロープが切れていたで流されてしまい、彼等が岩の上から私達を救出してくれたのです。バッテリーの電気を節約したかったので（無線機のバッテリーは、エンジンから充電するのです）、シムシル丸の無線をしばらく借りて、安全に投錨出来るところまで曳行してもらわなければなりませんでした。

私達は風の荒れ狂う夜を過ごし、機体が一晩中激しく揺れました。雨が吹き付ける、ひどい夜でした。夜中の3時頃、チャールズは大声に起こされました。私達は起きて、ちょっと罰当たりな言葉を使って愚痴をこぼして、外を透かして見ました。

そこには、荒れた海の上でグラグラ揺れながら、歌う水兵達が電報を頭上に捧げ持っていました。チャールズがそれをよめいっている水兵からひったくって読んで見ると、こんなことが書いてありました。

「日本の国民は、あなたがお越しになるのを切に期待しております。そして、あなたからのメッセージをお待ちしております。——日日新聞。」

チャールズはまた罰当たりな悪口を言いましたが、礼儀正しく返答しました。朝になって、あの水兵達は私達の機体に、もっと頑丈なケーブルを取り付けるために、来てくれたのだということがわかりました。電報は、単なるついでのものでしたのです。

日本の土の上で、最初の夜に私達が休んだところは^{シムシル}新知島のプロトン湾でした。そこは小さな港で、緑の火山のような丘に囲まれていました。私達がシムシル丸に曳行されて港に入って行った時は、静かな夕暮れ時でした。私達は小石の浜辺にある茅葺き屋根の、1軒の家の前で飛行機から降りましたが、その家は平屋のバンガローのようで、入り口は引き戸になっていました。

ご主人は、きつねの飼育場の管理人で、私達にお辞儀をして中に招き入れ、取っ手のついていない茶碗で、砂糖の入っていない緑茶を出してくれました。それから、素敵で清潔なマットを敷き詰めてある部屋を使わせてくれました（私達の子供部屋に昔、敷いてあった中国製のむしろのようなものです）。ご主人は靴を脱いで、一段高くなっている部屋に上がり、引き戸のクローゼットから3組のキルト（日本のマットレスです）を引きだして、私達のために一枚ずつ重ねてくれました。その後、私達は靴を脱いで、部屋に上がりました。その部屋の中には、砂と炭が入っている木の箱（火鉢）以外は何にも置いてありませんでした。その夜は部屋の引き戸を閉めて、すてきな眠りにつきました。

翌朝、私達はエンジンの修理に取り組み、歌う水兵達も手伝ってくれました。ついにエンジンを起動させた時には、私はひどく興奮してしまい、シリウス機が空に飛び上がるまで後ろを振り返りませんでしたが、漸く振り返ると、地上では彼等が全員、腕がちぎれるほど手を振っているのが見えました。

私達は再び、根室を目指して飛びました。無線で悪天候の警告を受けていたので、^{シヤナ}紗那の睡蓮と野性の菖蒲が咲き誇る湖に着水しました。

^{シヤナ}紗那では、私達は初めて日本の旅館に泊りました。引き戸の玄関に入ると、そこには大きな踏み段があって、そこで誰もが座って靴を脱ぎます。その段の上には、スリッパ（つっかけ靴でかかとのないもの）が並べられて、旅館の中に入る時はそれを履きます。宿の主人とその家族全員が、一家揃って正座でお辞儀をして客を迎えるのです。それから、廊下をぎこちなく足を引きずって歩きますが、まるでサテンのようにピカピカに光る板張りです。艶出しのワックスのせいではなく、多くの人の足でこすられて、磨かれてツルツルになっている感じです。

〔千島列島は当時日本の領土で、和室に布団をしいて眠ったのである。紗那は択捉島（エトロフ）の町。〕

宿の女将^{おかみ}はもちろん和服を着ています。とても敏捷に摺り足をしながら、小股で私達の前を歩きます。それから彼女は、紙で出来ている引き戸^{ふすま}の襖を開けて、スリッパを脱ぎ、私達の寝室であるマット（畳）を敷いた部屋に上がります。

小さな紗那の町には英語を話す人（とてもたどたどしい）が、3人いました。チャールズが、その夜、茹でたお米（ご飯）を頼もうとしましたが、通訳達は理解出来ず、持って来てくれようとはしませんでした（私達は既に、町役場で歓迎の挨拶を受け、りんごジュースに、りんごとトーストもいただいた後でしたので、無理ありません）。

わざわざ、椅子とテーブルを部屋に運び入れてくれ、ピンクの甘いお菓子と、ココアのような味のする薄いコーヒーを出してくれました。旅館で働いている人達は、部屋に入る前に必ずお辞儀をします。この後で、布団を広げて、背の高いチャールズのために2枚の敷き布団を繋げて敷きながら、クスクス笑っていましたわ！そして、私達の部屋の四方にある紙製のドア^{ふすま}からそっと出て行きました。木綿の着物（浴衣）を私達のために置いて行きましたが、どこの旅館でもこの素敵で涼しい清潔な着物を出してくれるのです。

翌朝は、私達は、膝を折ってクッションの上に正座して、日本の朝食をいただきました。宿の人は、それぞれの人の前に置くとちょうどよく収まる、脚のついたお盆（小さな漆器のテーブルです）を運んで来ました。そのテーブルの上には、既に食べ物を盛りつけた小さなお皿が5、6枚のっていました。お皿にはどれも蓋がついていて、大きさも形も様々です。漆器のボウルに入れられた魚のスープ（他にも入っていましたが、思い出せません）、蕪ときゅうりの塩漬け、焼き魚、そしてついに出ました〈茹でたお米〉がお茶碗で出され、これを全部お箸で食べました。

私達はその午後、またもや慌しく根室に向けて出発しましたが、悪天候の中を、茅葺き屋根の小屋の近くの湖^{かい}に降りてきました。雨が激しく降っていて、男の人が平底の船を櫂で漕いでやって来ました。彼は、とても古くてみすぼらしいニッカー（もんべ）をはいていて、私達の水上機を引いて、柳の木に繋ぐのを手伝ってくれました。それから、私達を自分の小屋に身振りて招いてくれました。

私達は草を掻き分けて彼の小屋に着き、ブーツを脱いで中に入りました。その部屋の真ん中に炉が切ってあります。その側に着物を着たおじいさんが、長いパイプで煙草をふかして座っていて、やはり着物を着ている青年が新鮮な魚を持っていました。

チャールズが地図を取り出して、私達がいるところを教えてもらってから、無線でそれを知らせました。そこは、国後島^{クナシリ}だったのです。

私達は「アメリカ」と言いながら、地図を指差しましたが、彼等は理解出来ませんでした。それで、「ニューヨーク」と言うと、青年の顔がぱっと明るくなり、

「ニューヨーク！」

と言いました。彼等は、みんなで話しながらニコニコしていました。チャールズが地図を指差しながら、

「ニューヨーク、カナダ、アラスカ、シベリア、カムチャッカ、千島列島、国後島」

と言いました。この中で、彼等にわかったのは、ニューヨークと千島列島だけでした。それから、私達が濡れた足を火にあぶると、みんなにっこりしました。外は、雨が打ちつけていました。

チャールズが魚の絵を描いて、自分の口を指差すと、彼等は笑って、魚とじゃがいもを料理し始め、自分達のお箸を添えて出してくれました。他に、白いご飯とお茶を少し（ここでは、とても貴重なものです）。

老人が口からキセルをはずして、私達に勧めてくれました。私はポケットから、会話を書いた小さいメモを取り出し（紗那で、誰かに手伝って貰って作ったものです）、

「オイシ」（おいしい！）

と言いましたが、これは、にっこりして魚を指差したので、ちゃんと通じました。

また、書き付けた紙から拾って読みながら、

「ツカレタ（疲れた）。トコ（ベッド）。ヒコキ（飛行機）」

と言って、戸口を指差しましたら、にっこりとして、わかってくれました。その小屋を出てくる時に、私達はお辞儀をして、

「アリガト」

を伝えようとしたのですが、彼等にはわかりませんでした。

次の朝出発するまで、私達は「ありがとう」の練習を何度も繰り返しましたが、出発時間になって、やっと正しい発音が出来るようになり、彼等に通じたのです！

その夜、また大声で起こされました。一番近い村から数人の人達が、私達のために瓶ビールを6本と果物を少し積んだ船を漕いで、やって来たのでした。

翌朝、無線で天候が良いことを確認して、もう一度根室に発ちました。今度は、28分で根室に着きました。大きな町で、広い港にたくさんの船が停泊しています。それから、海岸と埠頭に大きな人の群が見えます。

坊主頭で灰色の制服を着た大勢の男子生徒が、紙の旗を振っていました。市長をはじめ役人や市民総出で、私達を迎えてくれたのです。札幌に駐留しているスウィフト大尉もいらして、彼にはすっかりお世話になりました。丸石を敷いた道を日本のホテル（旅館）まで、花束、カ

メラ、記者、大勢の人波を押し分けて進みました。

旅館の部屋は二階のきれいな角部屋で、二面に障子がありベランダに出られました。和室の中は、実に爽やかですっきりしています。家具が少なく、清潔な畳、絵や写真等を飾っていない紙の壁、木材にはペンキが塗ってありません。そして、一幅の掛け軸を飾る場所が一つあります。この部屋には、中国の古い漢詩の掛け軸が掛けてありましたが、誰も意味を訳すことが出来ませんでした。掛け軸の下には、あやめの花が生けてありました。

まず最初に、私達はお風呂に入りたいと頼みました。ノームを出て以来、入浴をしていなかったのです。一日に一度、人前で洗面器を使って手や顔を洗うだけでしたので、あまりきれいになりません。

お風呂はとてもいい気持ちでした。湯桶で何回もお互いにお湯を掛け合い、全身をすっきり洗いました。髪の毛も洗い、歯も磨き、そしてお湯の中にゆっくりとつかって、蚤を落としました！

生き返ったような気がしましたわ。ああ、最高でした！

私達は根室で初めて、日本のディナーをいただきました。市長が接待して下さいました。畳の敷いてある大きな部屋に、口の字型に座布団が置かれた上に座りました。チャールズは、光栄な場所にあたる床の間の前に座りました。それから、とても華やかに装った（着物の裾を引きずり、固めた髪形の）ゲイシャガールがお酌をして、踊りを舞い、臨席の人達を楽しませました。

一人一人に小さなお膳が運ばれ、そこにはいろいろな大きさや形のお皿がのせられ、蠅を避けるために鳥籠のようなカヴァーがしてありました。（日本では、皆、食事の前後に必ず、それから誰かを訪問した時にも必ず緑茶を飲みます。たとえ、朝食の直後の訪問であっても。）20枚以上の違っ

たお皿があったと思いますが、どれも私が見たことのないものでした。^{*44}お醤油は、別の小さなお皿に入っているのです。

その後、私達のために芸者が踊りました。不思議なポーズをとる舞踊で、顔は人形のように表情がありません。足でステップを踏むというよりは、どちらかというと、手と長い着物の袖で踊るのです。それも、ゆっくりとした短調の歌に調子を合わせて踊り、とても美しいものです。両手の指は絶対に開きませんので、単純な仕草でも気が散ることはありません。鳥が飛ぶ時のように、敏捷で真っ直ぐな動きです。

根室で印象深かったのは、朝、丸石を敷き詰めた道路を、たくさんの人が木の下駄を引きずって小刻みに歩くので、その下駄の音で目が覚めたことです。ちょうど手を叩くような音で、不思議な音楽のようです。

1931年9月〔義母宛の手紙〕

お母さまへ

私達が到着した時に東京で受けたような歓迎を、私は見たことがありません。たぶん、ひと頃は、それもチャールズがバリからニューヨークに帰った時には、皆あんな風だったのでしょうか？

大声で叫ぶ群衆を押し分けて車が進みました。まず、熱心にこちらをじっと見ている顔、それから熱狂的な喜びで顔がパツと明るくなるのが見えます。群衆の人達は頭の上まで手を揚げて、「バンザーイ！ バンザーイ！」

と叫びます。「万歳」というのは、お母さまはたぶんもうご存じかと思いますが、「一万年」という意味です。すなわち、「あなたが一万年も生きますように！」ということです。

私は最初のうち、「ベンジョ」（トイレットのことです）という、よく使

^{*44} アンは陶磁器が好きで、イギリスではローストフトの磁器、メキシコでも陶器を購入している。

われる言葉と「バンザイ」とを混同してしまいました。私が浴衣を着て、スリッパを履いた姿で廊下を小刻みに歩きながら、相手かまわず

「一万年はどこですか？」

と質問しているのを見て、宿の主人はかなりのショックを受けたのではないかと心配しております。

チャールズは、アメリカの食事よりも日本食を好むので、大いに点数を稼ぎました。ご飯（味付けのしていないお米）、お砂糖の入っていないお茶、生魚、それから鰻等、どんなものも文句も言わず食べるのです。それにみんな、彼のお箸の使い方を見て驚いています。彼はロブスター（海老）でさえお箸で切るのですよ（シムシル丸という船で食事をした時に教わったのです）。

私は彼ほど箸遣いが上手ではないのですが、お刺身を一切れだけ、日本食が出るたびにいただいています。

でも、これから先は、私達は熱を加えたものしか食べません。それから、水も湯ざましだけを飲みます。南方の国や中国では、日本ほど食べ物に注意深くないのです。

今わかっている限りでは、私達はここから福岡へ行きます（全部新聞で読まれるとは思いますが）、それから中国の南京に直行し、その後ともかく北京に行きます。中国で2週間ぐらい過ごした後、フィリピンに行けたらよいと考えています。その後のことはわかりませんが、チャールズは（これは私とお母さまだけの内緒話です）、たぶん、アゾレス—バミューダ諸島のルートか、南大西洋ルートでアフリカから南アメリカを回って帰国することになるだろうと言ってます。私はおそらく後者のルートだと思います。それが最良の天候ルートであり、最もよく飛ばれているルートでもあり、飛行中ずっと無線の交信が出来るのです。このルートを取ることにになれば、おそらく私達が以前には行ったことのない南米の国々

である、ブラジル、アルゼンチンを訪問し（あるいはそこを通過）、それから太平洋岸を北上して行くことになるでしょう。もちろん、これはまだ仮の予定ですが、どちらにしてもお母さまにはお知らせしようと思ったのです。

1931年9月18日頃〔母宛の手紙〕

九州、博多の共進亭ホテル

愛するお母様

明日早く、南京に発ちます。手紙では全部を書ききれませんが、東京で非公式にしたことを、お母様にお知らせしたかったのです。大使館員のネヴィルさん⁽¹³²⁾の奥様と一緒に、日本の造園のお稽古や生け花とその哲学を習ったり、帝室博物館へ行って、とても素敵な教養のある館長に、茶の湯の説明をしていただいたりしました。お母様、岡倉覚三（天心）が書いた『茶の本』を手に入れて、夜に寝る前に是非読んで下さい。そこには、日本人の哲学のエッセンスが詰まっています。これを読んだこと、それから茶道について教えていただいたことが、この旅の中で私にとって、最高に胸躍るものでした。

それから、朝の公園を通ると、小さな男の子達が、竹の棒を持ってトンボを追っていました（棒の先にネバネバする物がついています）。日本では、コオロギもその音色を楽しむために店で売っています（カナリアのように！）。

息子を亡くした母親のことを詠んだ、とても心にしみる詩を教えてくださいましたので書いておきます。

とんぼ採り 今日 はどこまで行ったやら

(132) エドウィン・ネヴィル夫人。東京の米国領事の妻。

1931年9月26日

南京にて

愛するお母様

チャールズも私も、そこに着陸しただけで、中国に心を奪われています。東シナ海を過ぎると、何キロにも渡って揚子江⁽¹³³⁾からあふれた泥が見えます。そして、私達はもう中国の上空にいるのです。

見渡す限り広がる畑と、そこに横たわる大河には息を吞みます。ともかく、アコーディオン・ブリーツのように立体的な風景だった日本を発った後では、中国の広大な大地の風景を見おろすのは、強烈な印象を受けるのです。そこには何かとても壮大なものを感じます。その壮観な雄大さと、その国の歴史に対する感動です。

見渡す土地は、どこもかしこも小さな細長い形に耕されていて、アメリカの西部の大草原地帯とは全く違います。非常に広大な農地が続く中西部全体にわたって、〈空間と過疎〉という印象を受けます。

しかしここには、恐ろしいことが起こっていました。見渡す限り樹木が見当たらず、未開拓の土地もなく、細長い形をした裏庭の土地と、何千人かの人々が住んだはずの泥のあばら屋以外には、何も残っていません。あの悠久の大河の兩岸に沿って、それらはどれほどの時代にわたって、そこに存在してきたのでしょうか！

南京の街を目にした時、首都にされてしまった単なる田舎の町に、私はかなりのショックを受けました。空から見おろすと、近代的な建物は見当たらず、最初に目に止まるのは、市全体を巡る巨大な壁と、市街の二倍はある畑です。南京の人達は、私達が川に着水するものと思っていました。建物や小屋は戸口まで洪水に沈み、人々は全員サンパン（小型で木造の平底船）に乗って埠頭へ行ってしまいました。でも、私達は壁の外側にある湖に着陸しました。とてもきれいな場所で、柳の木があり、

(133) この時、揚子江は大洪水になっていた。

サンパンが多数竿を挿しながら進んでいました。チャールズと私は、歩いて古い門を通り市街に入りました。

南京はとても不思議なところ。「一体、私達が訪ねたい場所は、どこにあるのだろう」と、ずっと不思議に思い続けてしまうような街です。市街のほとんどは（壁以外は）幾度かの戦争で破壊されたので、ちょうど新しい建物を建て始め、通りを拡張し始めたところだったのです。

しかし、市民の中には多くの個性が窺えました。誰もが青い服を着ているような気がします（一番安価な染料です）。人力車の車引きの着たボロボロの上着の、強烈な青色が目を惹きます（この街には人力車がたくさんあります）。そよ風が吹くと車引きの上着がはためき、そのキラキラ輝く褐色の肌が青い色をもっと強烈に見えます。車引きは黒か赤の人力車を引いて、本当に通りを“速足”で駆けるのです。道路やあらゆるところで働いている人達は、この色の服を着ていて、ズボンはむき出しの脚の真ん中あたりまで巻き上げています。

私達は古い通りをいくつか歩きました。とても狭く、2台の人力車がかりうじて通れるぐらいで、丸石が敷き詰めてあり、両側には開け放した店が並んでいました。煉瓦の建物で、暗く窓がなく、店の前には派手な看板が出ていました。通りにはベルを鳴らす人力車、長いゆったりした服を着た男女達、小さなコンロと食べ物の入った籠を、天秤でかついでいるもの売りの人達（これは動くレストランです）の騒がしい行列が見られました。通りがかりの人達を呼び込むために商品を歌うように唱えたり、中が空っぽの竹の棒を叩いたりしています。

開けっぱなしの店では、男の人が人の群れに向かってさらさらと長い絹の生地をかざして、褒め言葉を並べて歌っています（本当に歌うのです）。店は全く不思議な取り合わせで品物がいっぱい置いてあります。黄土色の檜のチェスト、中国製の彫りもののあるチーク材のスタンド、

花模様のヨーロッパのたん壺、絹、いろいろな種類の紙、ビーズのついた派手な頭飾りや装飾品（結婚式、葬式、誕生用）、酒が入っている大きな緑色の磁器の壺。

運河にかかっている橋に沿って、彼等は青空市場に売り物を広げます。桶の中には魚や鰻、野菜、蓮根、果物、甘い香のするオリーブに似た小枝等々。ここでは、少年が銀白色の魚を手でギュッと握り締めて、売ろうとしていました。

先日、蒋介石^{*45}（首相で総統）とご夫人にお目にかかりました。彼は鋭くきっぱりとした、頭の回転の速い軍人で、夫人はウェルズリー大学の卒業生で、非常に美しく、非常に賢く、彼に対して全く従属的な立場をとっていませんでした。

ほとんど毎晩のように、坊やの夢を見ます。そして、私はとてもお母様が恋しいのです。

でも、帰途につく前に北京を見たいのです。

1931年9月28日〔母宛の手紙続き〕

この手紙は、この場所のことを半分も語っていませんし、なぜ私がお母様がここが好きなのか、どうしてお母様もここにいて欲しいかを、十分に説明していません。

私はいつも、メキシコのことを思い起こさせられています。茅葺き屋根と土間の貧しい土の家（でも中国では、日本人が使う座布団ではなく、スツールは使います）。鼻をたらし頭に腫物のある子供達や、男性達が大変な労働に耐えています。重い籠を二つも天秤棒で運ぶ人達、あるいは、大きな穀物の入った袋を4つも肩にのせて一人で運ぶ人。

町の通りもまた、どうもメキシコを思い出させます。汚れた白い生パ

*45 しょうかいせき（1887～1975）。軍人、政治家。1928年国民政府主席となっていた。1948年総統に就任、後に台湾に移り、国民党総裁として対中共政策の総指揮をとった。

ンのようなお菓子を手でたたいて平らにする男、熱い燃え殻の入った大きな鉢で栗の実をかき混ぜている男、銅の鉢でレタスを洗っている女（水が石鹸のような色をしていて、その前にいろいろなものを洗ったような感じです）、外でおシッコをしている小さな男の子。

御者と乗客が運賃のことで言い争っている間に、往来のど真ん中で止められてしまう馬車。それが止まっているために、その後ろの人力車と綿を運んでいる人の天秤棒がぶつかってしまいます。人力車引きは、綿を運んでいる人に仰々しく文句を言うために、梶棒を下ろします。すると、車引きが梶棒から手を離れたとたん、梶棒が上に勢いよく上がり、絹の服を着た乗客が後ろにひっくり返り、道端に投げ出されます。乗客が大声を上げても、聞こえません。騒音がひどいのです。彼はあまりにもみっともない格好になっているので、人力車から降りる時には、笑うより手がありません。幼い男の子達がいっぱい（いろいろ違った形に頭を剃られていますが、それぞれ何かの病気を避けるためです）、立って回りをとり囲みしきりに彼を見えています。そこへ、かん高いキーツと鳴る音を響かせて手押し車がやって来て、子供達は追っばらわれてしまいます。

1931年9月30日

ウーファー ハンコウ
蕪湖から漢口へ飛行中に

愛するお母様、

今回は、私は手荷物置場に座っています。というのも、私達はロックフェラー研究所のポーシック博士という方を乗せて、洪水になった地域をあちこち飛んでいて、博士は私の席から地上を見おろして調査していらっしゃるからです。ここはとても居心地が良くて、荷物置場のハッチの穴から外を見ることが出来ます。

最初の調査は二人だけでしました⁽¹³⁴⁾が、私が飛行機を操縦して、チャー

(134) 南京に到着した直後、リンドバーグ夫妻は何百人という人々が、家を失い飢えに苦しんでいることを知り、救済団体が洪水の範囲を知ることが重要であり、また、中国ではリンドバーグ夫妻の飛行機だけが、唯一その範囲を発見するために必要な航続距離を飛ぶことが出来るということを知った。夫妻は自分た

ルズが洪水の様子をスケッチしたり、地図に書き込んだりしました。初日は実にショッキングな体験でした。大運河^{*46}の東側は南京から北京まで、揚子江と大運河の両方が氾濫して洪水となっているのです。その範囲の広大さといったら信じられません。どちらを向いても見渡す限り、水と浸水した樹木の頭と崩壊した茅葺き屋根しか見えず、また、水面のあちこちが茶色ににじんでいて、そこは、かつて泥で出来た家のあった村か、家か、あるいは道路があったところなのです。

私達が初日に調査した面積は、マサチューセッツ州に相等する広さだと判断しています。それはあたかも、マサチューセッツ州の上をスベリオル湖で覆ってしまったようなものです。それに、ちょっと高い場所がないので、被災者の大きな集団に簡単に近づけず、援助も出来ません。私達は、何千という小さな被災者の集団の上を飛びました。そこには2軒か3軒の泥の家があり、その周りに水が入ってこないようにするために、必死になって盛り上げた小さくて哀れな泥の堤防が見えました。どの家も貯蔵してあった穀物を家の中に引き入れていましたが、これもおおかた半分は水につかっています。

彼等は一度収穫をしていますので、チャールズが言うには、溺れなかった人達には、おそらくまだ生き延びられるだけの食料は十分あるとのこと。それにしても、春が来る前に水が引けるという望みはあまりなく、また、この秋には確実に浸水したままなので、冬の刈り入れは出来そうもありません。全員に手をさしのべることも出来ません。もちろん、道路は跡形もありませんし、また大きな船が通れる川もありません。水面は何キロにもわたって、サンパンだけが行き交う手段です。（中には、一家全員がサンパンに乗って漂いながら生活している家族もあります）

あまりにも多くの個々の集団がありすぎました。孤立した何千というグループです。まったく絶望的に思えます。

ちの計画を変更して、洪水の被害がどの範囲まで及んでいるかを地図に記録し始めたのである。

*46 黄河と揚子江を繋ぐ、中国の南西部にあるターユンホー。

今は、^{ワーフー}蕪湖（ブーフーと同じように韻をふみます！）を発ったところです。あの辺の洪水はかなり悪い状況ですが、援助は人々に届かないわけではありません。山の多いところでは、中には被害を受けていない町や作物があります。私達は、水浸しになった畑の上に着水しました。そのうちに、人がたくさん乗っているサンパンや桶が、周りに集まってきました。私は最初、この桶は洗濯だらいかと思いましたが、実は漁のために作られたものだったのです。男の人が一人その中にしゃがんで、（バターボールをたたくような）^{かい}櫂状のものを両手に持って舵をとるのです。サンパンに乗った女性が一人、私に向かって大声で呼び続けていましたが、私が理解しないということがわかったのか、手で茶碗の形を作り、もう一方の手でお箸を使っている真似をしました、彼女は食べ物欲しかったのです。私達はサンドウィッチを一つか二つ持っていました、それを私があげるのを、チャールズは、どうしても許してくれませんでした。もし私がそうしていたら、それを見た被災者達がドッと殺到してきて、私達は襲われてしまったことでしょう。

先日はチャールズと、他に二人の医師が、全面的に洪水に見舞われてしまった興化の城壁の外に着水しました。そこへ、サンパンが寄ってきました。一人の医師が機体の外に出て、サンパン上の医師に解毒剤や血清等の薬品のいっぱい入っている袋を手渡しました。

それを見ていた人々は、袋を見た途端に「食べ物だ！」と思って一斉に袋を受け取った医師を襲い、それから袋も奪ってしまいました。医師の乗っていたサンパンが、大事な血清の入った袋と共に沈んでしまい、今度は被災者たちが、チャールズの乗ったシリウス機によじ登り始めました。チャールズは（これは公表しては困ります）連発銃を出してきて、襲われた医師を取り戻し、そこから逃れるために、空に向けて一回発砲しなければなりません（この医師も中国の方で、懸命になって説得

しようとしていたのですが）。これからは、食物の供給や、必需品は武装した船で送らなければならないでしょう。

しかし、先ほどの蕪湖では救済作業が進行しています。無料の食物供給所があります。私達は、午後遅くなってから出発して、高い丘の上に建っている病院に隣接した、水浸しの畑の中に着水することが出来ました。（中国人は丘の上ではなく、畑の近くにある低地で生活しています。丘陵にはたいいてい作物がいっぱい作られています。）

私達はサンパンに乗って、洪水の畑の上を病院に向かって進み始めました、決壊した堤防を越えて行きましたが、川の水がその決壊した堤防の上を急流のように流れていて、その流れがあまりにも速いので竿を使って舟を漕ぎ進めることが出来ませんでした。それで、全員サンパンから降りて泥の堤防の上に立って、舟を引いて通すまで待っていました。

もう一つの畑を越えて、冠水した道路（そこでサンパンが舟底をこすってしまいました）を進んで、丘の麓^{ふもと}まで行き、そこからは歩いて丘を上ることが出来ました。丘の上には、近代的な煉瓦造りの家が一塊りになっていました。

病院長のブラウン医師とその奥様が、私達をお宅に連れて行って下さり、そこでアメリカ人の医師、看護婦など大勢の職員と、何人かの宣教師達に紹介されました。

立派な近代的大病院はもちろん満員です。症例の大半は結核と赤痢の患者です。実はそれを聞いて驚いたのですが、外科の患者のほとんどが、銃で撃たれたか、火傷を負ったか、金銭や食料をねだる賊に暴行をうけた人達でした。

蕪湖の道は水浸しですが、人々はサンパンや人力車に乗って往来し、店主達は椅子やテーブルに板を渡して、そのまま商売を続けています。

もし水位が高くなると、急場しのぎの二階を汚い水の上に作ります。水浸しの道を歩く時には、木の台に渡してある厚い板の上を歩きます。

洪水になった畑ではどこでも、漁が行われています（これで、多くの人の命が救われています）。中国の人達が言うには、洪水になったばかりの畑で必ず魚が捕れるのは、日照りの年にはイナゴの卵はイナゴになるけれど、雨がちの年にはその卵は魚になるからなのです！

1931年10月の初旬〔姉宛の手紙〕

上海への途上で、英国海軍航空母艦ヘルメスにて

愛するエリザベス

私は、英国の航空母艦ヘルメスでは女性乗客第一号となり、あらゆる規則を破っています。許可を下さった艦隊の提督はとってもいい方で、コウリン・マックリーンというお名前ですが、提督の許可であるということで、私が乗船出来たことは間違いありません。

素晴らしい休日気分で、おまけに私は14歳位にもどった気分です。嬉しくて恥ずかしくて、ラッパや敬礼や制服、梯子をかけ上ったり降りたりすることに、胸を踊らせています。私達の初めての海外旅行の時はどんな気持ちだったか憶えてる？——あら、違うわ。ヨーロッパではなくてパナマだったわね。今回は私はそんなには恥ずかしがっていないの（誉めたたえよ）、チャールズがいつも一緒だから。でも、キャビンではあなたにしがみついていたみたいに、彼にしがみついているわ。

「ねえ、チャールズ、お願いだから一人で行かないで。私が一人で行くと、誰もが私に話しかけないと悪いと思って……」

夕べ、祝賀会がありました。空母就役の記念の式典でした。スピーチや面白い言葉を添えた乾杯や、部屋のあちこちで時折り起こる爆笑。あ

なたがいてくれたらどんなに良かったかと思って、そうすれば14歳か16歳の時のように、ベッドのはしに一緒に座ってこっそり話せたわね。

「どの人が一番好き？」

「ええ、ホント？ 私もよ！ 私がいいと思った人は、あなたも気に入るのよね。あの人移ってきてあなたの隣にも座ったでしょ。あなたのことが一番好きななのよ、あの人。」

「ええっ、知らないわ。あなた、みんなが女王蜂って呼んでた人と話してたでしょ。」

「ギターを弾いてた人も、私好きよ。彼が言ってたことを聞いた？」

そんなことを夜遅くまで、ずっとお喋りしたものだっただわね。

こんなふうになっているのは、“油断ならぬ揚子江”で転覆したからなの。そして、ヘルメス号が誠に雄々しくも、上海までシリウス機を修理するために私達を運んでくれると、手を差し伸べてくれたのです。この事故の記事は見えてませんが、どんなふうに伝えられているのかと思って……たぶん、大げさに報道されたのだらうと思うわ。

はらはらしたけれど、実際は危険ではなかったのよ。揚子江の流れはとても急で勢いがあるの。錨を下ろしているのに、船が猛烈な勢いで航行しているような感じ。一昨日、水上機の翼が水に浸かってしまいました。もし、翼の角度が流れの勢いでちょっとでも曲がると、クレーンが一方に引っばって、河の流れが反対方向に引っばるようなことになります。

この日は、チャールズが救命具をつけた私を、後ろの搭乗席に乗せました。救命具は折り畳んであるものです。レバーを回すと中の二酸化炭素の瓶が壊れて、膨らむはずなの。ヘルメス号にのせた水上飛行機の外では、二人の男性が滑車につかまって、船の先端に立っていました（二人とも救命具を着けていました。船で働く人は全員着用するのよ）。滑車が

船の甲板から、私達を機体ごと河の中に、すっとまっすぐに降ろしました。ところが、船のエンジンのせいか、流れが速いせいなのか、シリウス機はヘルメス号から引き離されてしまったの。クレーンのケーブルをはずすことが出来なくなり、シリウス機のプロートと翼が、揚子江の中に引きずり込まれてしまいました。そのうちに、河の流れが私達をひっくり返し始めたわ。

チャールズが大声で、
「そこ、後ろに気をつけて！」

と叫びました。私はシートベルトをはずしました。

「飛び込んで！」

(河の中で翼が軸になって、機体をひっくり返していたの。) 私は立ち上がりました。

「早く、飛び込んで。」

すぐに、飛び込みましたが、奇妙なことに、これっぽっちもためらわず、また怖くありませんでした。水に潜りながら静かに考えたの。

「私は流れに向かって飛び込んでいるけれど、機体はあの方向に転倒しているから、おそらく私は機体にぶつかると思うわ」

次の瞬間に、私は機体より下流に浮上しました。機体の真下を、するりと抜け出て来たのです。救命帯が両側に、だらしなくもバタバタと動いていましたが、驚くほど簡単に泳げました。怖いという感じも一切なく、息苦しくも、何ともありませんでした。泳ぎ方は知っていたし、リラックスしていたから。チャールズは私が飛び込んで、水の中に潜るのを見てから飛び込みました。浮上してきた時、

「小さなアン・パン (アンのお愛称) 見ちゃったよ。チビドロガメみたいに、まったく幸せそうに水をかいてたぜ」
ですって。

[当時の飛行機の機体には、木や布が使われていた。]

振り向くと、彼が口を閉じてにんまりしながら、私の方へ泳いで来るのが見えたの。それから、あの二人の船員も……。はしけにたどり着いて、4人そろって一緒によじ登りましたが、みんな、「大丈夫」——「大丈夫」——「大丈夫」と言っていました。その時一番最初に頭に浮かんだのは、「10週間も、一度沸騰させた水で歯を磨いてきたのに、この揚子江の泥水をバケツ何倍分も飲んじゃうなんて！」でした。

その後、振り返ると、水の中に浸かっている翼から木片や布が剥がれるのが見えて、情が移ってきた大切な水上飛行機のことを思って、本当に気分が悪くなりました。はるばると、カナダ、アラスカ、シベリア、千島列島の霧を超えて来たのに、揚子江の流れに数秒のうちにマッチ箱のように壊されてしまうなんて……。この頃には、機体はほとんどひっくり返っていましたが、それでもケーブルで止められていました。何かが落ち、

「パラシュートが流される。あれは拾っておこうよ」

とチャールズが叫びました。でも、その時私は、「私達に残るのはあれだけね」と思ったわ。

それから、水をポタポタたらしながら、ヘルメス号の艦長のキャビンまで案内され、誰かのシャツと、誰かのショートパンツと、誰かの長いコットンの白いソックス、ハンカチ、熱いお茶と熱いポヴリルのスープとをいただき、私の体内に入ってしまった揚子江のバイ菌を殺すために、ブランデーとひまし油を勧められました！

機体を元どおりに起こすのに、かなりの時間がかかりましたが、船員達はそれ以上あまり損傷を与えずに、非常にみにぎりに機体を起こし、甲板までゆっくりと持ち上げました。翼からはかなり大きな部分がはずれてしまいましたし、ケーブルが右側をバシッと打った時に胴体の一部に

裂け目を作ってしまった。それでも、水上飛行機は驚くほどの姿をとどめていて、無くなったものは他に何にも無かった。私の上着、無線通信用の紙包、丁寧に調理されたランチでさえ完全な形で姿を表わしました。もちろん、水につかっていますが、すべてありました。無線機はまだ使えたのよ。

私は事故を恐れていたし、恐怖におののきながら人生から引きずり下ろされることを恐れていた。とても気分が浮き立っていたわ。私はそんなふうには死にたくありません。恐怖の叫びを上げながら、イヤです。でも、人が死ぬ時はそういうふう死ぬとは思わないわ。そんな思いをしないで済むようになっているのよ。事故の時は何もかも。3秒で終わっちゃうのよ。私にもわかったけれど、危険を認識したところで、全然恐怖は感じないの。自分はその外にいるのね。でも、チャールズが、もし私が「機体にぶつかったとしても、ひどい怪我はなかっただろう」って、言ってるわ。一瞬危険に見えたけれど、それほどじゃなかったのよ。

でも、私の頭の中にパッと浮かんだことを、いまだに不思議に思っているの。最初によぎったものは、「修理するのに、どれくらい時間がかかるのかしら。家にはいつ帰れるのかしら？」だったのよ。

1931年10月⁽¹³⁵⁾ 【妹宛の手紙】

ワイオミング州シャイアンへの途次

愛するコン

昨日、ヴィクトリアで手紙の包みを受け取りましたが、飛行機の中が字が読める程度に明るくなってから、すぐに読み始めました。お母様とエリザベスからの現実が強烈に綴ってあるお手紙が2通、それとあなたからの心のこもったお手紙が1通。

(135) リンドバーグ夫妻は、自分達の水上機を上海で修理させる計画だったが、10月5日、まだヘルメス号の船上にいる時、アンは母から父の死を知らせる電報を受け取った。そこで、夫妻は船で帰国し、シリウス機はカリフォルニアのロッキード飛行機製作所に、修理のために送り返すことに決めたのである。パン

でも、私は詳しいことをとってもしりたかったの。戻ってくる間ずっと、パパが亡くなったという現実（どんな死でも）に触れることが出来ない、という感情にさいなまれてきました。おそらく私は、この現実を直視することは決してないと思います。抑え切れない自然に込み上げてくる感情と、一時的な衝動と、時空を超越した大きな頂からすべてを見渡せる、長く無感覚な時との狭間で揺れていましたが、それはパパを知らなかった英国の政治家が、一人の世界の偉大な人物の死を悼んだり、あるいは誰かが歴史を読む時に、

「ドゥワイト・モロウが生きていて、これこれの事態を制していさえすれば……」

と言ったりするようなものの。

そして、私と現実の間にはいつも感情のベールか、時のベールがかかっています。手紙は、現実を激しく私に伝えてくれたので、とても役に立ちました。でも、あまりに感情的になったわ。

外で人と接していたり、仕事をしている時には、パパの死を実感したり考えたりしないと、気持ちの上では非常に助かるのですが、この現実がクルクルと巻き戻りはね返って自分に飛びかかって来るまで、心の奥に押し込めておくのです。それは、真実でも、はっきりした静かな実感でもありません。しかし、振り子はあまりに遠くまで揺れて、私の感情をゆさぶるのよ。

チャールズが^{そば}側にいてくれたので、ずっと耐えやすかったし、それに見知らぬ人達のお蔭で、私は心を強く持って、冷静でいることが出来ました。家では、あなたやみんなにとって、それがどんなものだったのかを想像することが出来ません。でも、そのことについては今は触れないことにしますが、死については最も素晴らしい考えを持っていたパパがこの世にいないくて、その現実を説明して私達に理解させてくれることが

クーバーでアンは、父の死に関する家族からの手紙を初めて受け取り、この手紙は飛行機の中で、返事として書かれたものである。

ないというのは、奇妙な気がします。パパはそれを静かに、深く正気で眺めたと思うの。私に出来ることは、その現実を大地の中を巡っている偉大なサイクル——誕生、生、死——のように大きくて人とはかわりのないサイクルとして眺めることだけです。次のように終わるメイスフィールドの詩を知ってるかしら？

そして私達は、うたかたのように、
ローマの街の中を吹かれる塵のように消え去り、
絶えずとどまることがない。
私達には家がなく、
ただ美があり、力があるのみ、
果実に哀しみ、花に遊び、
果てしなくその時の間を彷徨う。

しかし、私達は彷徨いながらも、
そんなにも美しく激しい生命の意義を
見出すのだ、
私達がここからさすらい出ても、それはそのまま生き続け、

あとから続く人達が、
たとえその前途が真つ暗で見えなくとも、
その背には感じる、
私達の遊びを、心の砦を。

親愛なるお母さま

長いことご無沙汰しておりましたが、たくさんお知らせしたかったことがございます。まず最初に申し上げるべきだと思いますが、実家からの最初の頃に来た電報（暗号文）で、父の葬儀のためにお母さまがお出かけ下さるということを、知りました。母にとっては、お葬式はとても大切なことであり、お母さまがわざわざお出かけ下さったということは、お母さまが思われる以上に、母にとっては大きな意味がありました。父に対するお悔やみの気持ちには、家族が心から感謝しておりました。私達全員がありがたく思っております。

家にいられるということは、なんて嬉しいことなのでしょう。それに、あの子！ 坊やがいます。強くて独立心のある男の子で、しっかりと小さな足でふんぞり返って歩いております。初めは、私達のことはわからなかったのですが、怖がりませんでした。チャールズのことは全然怖がらず、彼はひどく喜んでいました。

チャールズはあの子にとっても興味を持ち始め、一緒に遊んだり、朝には自分のお皿からコーンフレークスやトーストやお砂糖やジャムを与えたり、高い高いをしたりして、甘やかしています。一度か二度、高い高いをしてから、あの子はチャールズの方に寄って来て腕を広げて、

「もっと！」

と言ったのですよ。チャールズはあの子が“ハンサム”であり、“かなり面白い”ことを認めています。お母さまからいただいた赤いりんごを一つ、あの子に与えてみました。たぶんボールにして遊んでしまうと思ったのですが、全然はずれでした。あの子は、あのりんごをボールにして遊ぶには勿体ないとわかり、すぐに4本の前歯を突き立てました！

母やエリザベスが、お母さまに言うておりましたでしょうか。あの子はお母さまからいただいた子羊か猫のぬいぐるみを、必ずあの素敵なシッポをつかんで、毎晩ベッドに連れて行きます。特に子羊（あの子は「メー」と言えます）はお気に入り、掛け布団の下に隠してから、嬉しそうに出して見せるのです。かくれんぼです。

初めておもちゃのアヒルを見た時には笑いました。チャールズが坊やの後ろからアヒルを引っぱった時に、音を少し怖がっていましたが、あの子は仕方なさそうに笑っていました。あの子にアヒルを引っぱらせようとしても、それはまだやってくれません。

1931年11月16日〔妹宛の手紙〕

クリーヴランドにて

親愛なるコン

私達クリーヴランドに来ています。お母様と一緒に。生活から抜け出して、ひっそりとした取り残された場所に入ったような感じがするわ。騒々しい街の通りから、小さな公園にやって来た時の感じよ。そこには輪ころがしをしている子供達、乳母車を押している乳母達、座ってじっと眺めている老人達がいるだけで、時は長い安らかなため息なの。

ああ、コン、あなたチャーリーが学校⁽¹³⁶⁾に行くところを見てよね。初めて行った日に、子供達がみんな大騒ぎしてもてはやしたの。皆あの子のまわりに寄って来たの。そうしたら、今まではもてはやされていた一番小さな男の子がチャーリーの背中を叩いたの。あの子は座って泣いたわ。完全にうろたえたのよ。わざと誰かが彼に危害を加えるなんて、それまでの彼の人生には全くなかったことでもの。

先生と子供達が、そのドナルドをチャーリーから遠ざけようとしたの

(136) エングルウッドのザ・リトル・スクール。アンの姉のエリザベスと友人のコンスタンス・チルトンによって開校された。

だけれど、ドナルドは走り回って、チャーリーが泣きやんだかと思うと、またぶったり、シャベルを取りあげたり、髪の毛を引っばったりするの。見ていたら5回もしてたわ。

みんなあの子の巻毛に魅了されているの。可愛い女の子がコテで、ぶくぶく沸騰して湧いてくる金色の泡かなんかのよう、こそげとろうとしたのよ。それであの子は、最初の3日間はほとんど泣き通しだったわ。

あの子は幼すぎるのではないかと（学校が受け入れる年齢より1ヶ月半幼く、あそこの子供の誰よりも6ヶ月幼いの）意見を述べたところ、リトル・スクールの職員全員が発奮して、チャーリーに特別の配慮をする計画をたてたのよ。4人の先生が庭に立って彼を見ているの、それにデイヴィッド・ミッチェル博士⁽¹³⁷⁾にも来ていただいて会議も招集されたのよ。

結局、チャーリーは当分の間砂場で一人で遊び、大勢の子供達が“社会的に適応させるため”襲う前に、“自分の環境に慣れる”ことに決まりました。とかくするうち、あの子というのは、傲慢にも自分の社会的責任を意に介せず砂場で遊んだり、落ち葉の中をガサガサ音をさせて歩いたりして、100パーセント満足しているわ。

コン、あなたにどうしても家を見てもらいたいわ。建築家にかかなりの衝撃を与えるほどの、現代的壁紙を使ってあるし、今は、モダンなチンツの家具を探しているところよ。もう花束、特に薔薇は我慢できないと思うの。クレトンの薔薇って何だかうんざりするのよ。丸くふくらんで、面白みがないの。

1931年12月〔義母宛の手紙〕

エングルウッドにて

親愛なるお母さま

(137) ザ・リトル・スクールの顧問心理学者。

私は一種のプトマイン中毒で、1週間以上寝ております。少しよくなりました。そんなわけで、お母さまにクリスマスのことでお手紙も差し上げず、何にもお知らせしませんでした。計画では、私は今プリンストンにいて、いろいろ準備をしているはずなのに、まだベッドにおります。これまでは、クリスマス前にプリンストンに行けるかどうか少し疑わしかったのですが、今は行けると思います。でもいろんなことが、行き当たりばったりになってしまうとは思いますが。

チャールズが、お母さまの休暇はクリスマスの前日からだと言っていますので、プリンストンには丁度クリスマスにはいらっしゃれますね。とても楽しくなると思います。チャーリーだけは特別ですが、クリスマスのお祝いはありませんにしています。

お母さまがいらっしゃる間は、私達もプリンストンに滞在します。お母さまにチャールズ・ジュニアを見ていただきたくてたまりません。お医者様に「あの子はどこも悪いところはないけれど、散髪をしないと駄目だ」と言われました！ でも、私はあの子の巻毛を、お母さまにお見せするまでは切りたくはありません。今は、チャーリーとチャールズ親子、とても楽しくやっています。

チャールズは、あの子の顔を見ると、

「おい、君」

と呼ぶのです。それで先日、チャールズが部屋に入ってくると、あの子が彼を見上げて

「おい！ おい！」

と言いました。それからこの間などは、チャールズが部屋を出て行くと、

「おい、ないない」

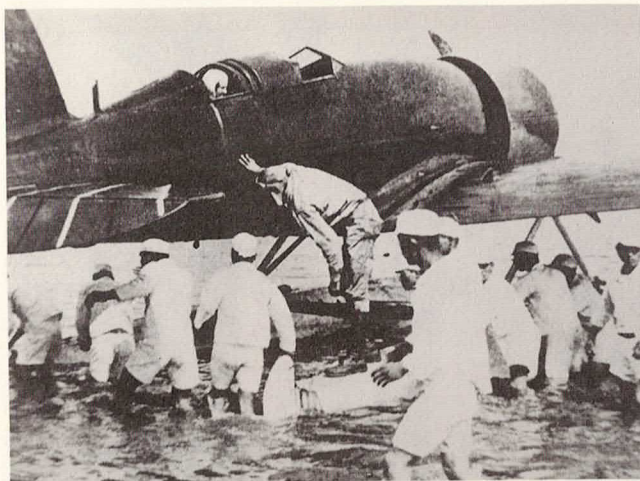
と言ったものでした。



1931年8月、ようやく辿り着いた根室で、歓迎の花束を受けるリンドバーグ夫妻。
(平本國夫氏提供)

リンドバーグ夫妻歓迎祝宴の開場にて。1931年8月、於根室公会堂。(平本國夫氏提供)





霞ヶ浦に着水したシリウス機に、誘導のために駆け寄る航空隊の整備員。
1931年8月26日。(根室市博物館開設準備室提供)

1931年9月12日、土浦の霞月楼・松の間で開かれた歓送祝宴。
(堀越恒二氏提供)



失意の時 *Hour of Lead*



チャールズ・ジュニア [1歳]
1931年